論文 鉄筋強制加熱による熱画像処理に基づいたコンクリート内部の 空洞・ひび割れ非破壊検査手法に関する研究

臼木 悠祐*1・茂木 淳*1・谷口 修*2・大下 英吉*3

要旨:著者ら¹⁾は,新たな非破壊検査手法として低周波型交流電流を用い鉄筋自体を強制加 熱させ,コンクリート表面温度から鉄筋の腐食評価システムの構築に着手している。本研究 は,同様の方法でコンクリート内部に存在する空洞およびひび割れの検出システムの構築を おこなった。その検出原理としては,空洞およびひび割れの熱的特性を利用したもので欠陥 部のコンクリート表面および健全部のコンクリート表面,両者の温度差から判定を行うとい うものである。

キーワード:非破壊検査,通電加熱,空洞,ひび割れ,熱的特性

1. はじめに

コンクリートのひび割れおよび内部空洞の大 きさ,深さ,厚さの評価に主として用いられて いる非破壊検査手法には,電磁誘導法,超音波 法,電磁波法,放射線法,打音法等がある。従 来,電磁波法の一つである赤外線サーモグラフ ィ法は,一度に広範囲の計測が可能であるとい う利点から,主として用いられている-手法で ある。赤外線サーモグラフィ法には,一般に, 自然発生的に生じる欠陥部の温度差をパッシブ に計測するパッシブ法,計測対象に熱負荷を与 えるアクティブ熱負荷によるアクティブ法があ る。前者は、日照や外気温変動により計測を行 う方法であり,コンクリート構造物が置かれて いる立地条件,環境,気象条件等による様々な 因子が計測結果に影響を及ぼす等の問題点があ る。後者は、コンクリート構造物表面を強制的 に加熱させることにより熱流を生じさせる方法 であり,加熱むらから生じる検出精度の問題が ある。それにもまして重要な問題は、従来の各 方法で評価可能な劣化要因は剥離・空洞,ひび 割れのみであり,一度に広範囲の計測が可能で あるという赤外線サーモグラフィ法の一つの利

点を最大限に活用し,それら劣化要因も包囲し た上で他の劣化要因をも評価可能な新たな方法 の確立が必至である。

著者ら1)は新たな非破壊検査診断手法として, 鉄筋自体の通電性,熱伝導性を利用し低周波型 交流電流により通電加熱させ,コンクリート表 面を赤外線センサにより測定し,コンクリート 表面温度の経時変化より鉄筋腐食の定性的かつ 定量的評価に関するシステム(以下,本システム と称す)の構築に着手しており,コンクリート表 面の温度分布,温度履歴,それを用いた熱伝導 解析手法により,それらの評価が可能であるこ とが確認されている。前述したが,赤外線サー モグラフィ法は,一度に広範囲の劣化計測が可 能であるという利点があり,本システムを鉄筋 腐食に留まらず、コンクリート内部の剥離・空 洞やひび割れ等の劣化に対しても評価対象を拡 張することができれば,現在の非破壊劣化手法 の大幅な進展につながるわけである。

本研究は 鉄筋コンクリート中の鉄筋を通電加 熱することにより,鉄筋の腐食評価だけでなく, 鉄筋コンクリート内部の剥離・空洞やひび割れに 対して本システムが評価可能であるかどうかの

- *1 中央大学大学院 理工学研究科土木工学専攻 (正会員) *2 五洋建設(株) 技術研究所 主任 工修 (正会員)
- *3 中央大学 理工学部土木工学科教授 工博 (正会員)

| 水セメント比 | 最大骨材寸法 | スランプ | 細骨材率 | 単位量(kg/m ³) | | | |
|--------|--------|------|------|-------------------------|------|-----|------|
| (%) | (mm) | (cm) | (%) | 水 | セメント | 細骨材 | 粗骨材 |
| 55.5 | 25 | 12 | 45.5 | 159 | 257 | 840 | 1030 |

| 表 - 1 | コンクリ | — | トの配 | ,合表 |
|-------|------|---|-----|-----|
|-------|------|---|-----|-----|

表 - 2 各空隙の位置





図 - 1 模擬空洞の存在する供試体

確認を行うとともに、コンクリート表面に及ぼす それら劣化要因の影響を詳細に評価した。さらに、 鉄筋から空洞やひび割れまでの距離をパラメー タとして本システムを適用することにより検知 可能な鉄筋からの距離に関して本システムの適 用範囲を明確にした。

2. 実験概要

本実験で用いた供試体は二種類であり,空洞 が存在するコンクリートスラブ供試体およびひ び割れが存在するコンクリートスラブ供試体で ある。

2.1 実験に用いたコンクリートスラブ供試体

(1) 空洞が存在する供試体

空洞の検出を行うためのコンクリートスラブ 供試体は,図-1 に示すように寸法 600×600× 200mm であり,かぶり厚さ 30mm の位置に長さ 800mm のD16 異形鉄筋を水平方向に2本配置し

表-3 各ひび割れの幅と深さ 番号 3 4 2 5 6 8 1 7 幅w(mm) 2.0 1.0 0.3 0.3 1.0 2.0 0.3 1.0 30 深さ h (mm) 30 30 30 10 10 10 30 9 10 11 12 13 14 15 2.0 0.3 1.0 2.0 0.3 1.0 2.0 30 30 30 30 10 10 10 ıb 鉄筋A a列。 4 b列 7 8 SO 鉄筋 B c列 10 11 12 d列 e列「 鉄筋C $\geq 100^{4}$ 150 150 100 500 (a) 模擬ひび割れ配置図 (b) b - b ' 断面図

図 - 2 模擬ひび割れの存在する供試体

た。実験で用いた模擬空洞は,空気と熱的特性 がほぼ等しい発泡スチロールであり,その寸法 は50×50×10mmの直方体である。模擬空洞は, 図-1(a)および表-2に示すように8箇所に設置 した。深さ方向に関しては,図-1(b)に示すよ うに全ての模擬空洞がコンクリート表面から模 擬空洞上面まで10mmの位置に固定した。ここ で,表-2における距離 ℓとは,図-1(b)に示す 鉄筋中心から空洞中心までの距離のことであり, 本加熱システムによる適用範囲を判断するうえ で必要不可欠なパラメータである。なお,コン クリートの配合は,表-1に示す通りである。

(2) ひび割れが存在する供試体

ひび割れの検出を行うためのコンクリートス



ラブ供試体は 図 - 2 に示すように寸法 500 × 500 ×120mm であり、かぶり厚さ 30 および 46mm の 位置に長さ700mmのD16異型鉄筋を格子状に配 筋したものである。模擬ひび割れは、通電加熱 を行う鉄筋の直上或いは鉄筋から離れた箇所に おいても評価可能か否かを検証するため図 -2(a)に示す通り 15 箇所の位置に設置した。本実 験における模擬ひび割れのパラメータは図 -2(b)に示すひび割れ幅wとその深さhであり, 模擬ひび割れ幅wは0.3,1.0および2.0mmの3 種類,ひび割れ深さhは10および30mmの2種 類である。なお,供試体に設置した模擬ひび割 れ幅と深さは,表-3に示す通りであり,模擬ひ び割れ長さは全て 50mm とした。コンクリート の配合は、空洞が存在する供試体と同じ配合と した。

2.2 赤外線センサによる実験方法および条件

空洞の検出およびひび割れの検出手法は,図 -3に示すように,図-1および図-2に示した コンクリートスラブ供試体の鉄筋両端に低周波 型交流電流を用いて一定電流300Aで3分間通電 加熱し,赤外線センサを使用しコンクリート表 面温度の測定を通電直後から5秒間隔で60分間 測定した。なお,コンクリートスラブ供試体か ら赤外線センサまでの距離は200cm,室温は 24 の一定条件で実施した。

3. 空洞供試体の通電加熱試験結果

3.1 コンクリート表面の熱画像

鉄筋に強制的に与えられた熱は鉄筋からコン クリートに伝達されるわけであるが,図-4に示



図-4 鉄筋からの熱伝達性状

すようにその伝達性状は,温度勾配が卓越する コンクリート表面に向かって鉄筋から同心円状 に伝達される。したがって,鉄筋近傍のコンク リートと鉄筋から離れたコンクリートでは熱の 伝達する時間が異なってくるわけであり,鉄筋 から異なる位置に存在する空洞に対して熱の伝 達時間が異なってくる。すなわち,任意箇所に 設置された空洞を評価するためには,時刻暦に より変化するコンクリート表面温度性状により 捉える必要がある。そこで,本実験の測定時間 60分を,0~3分,3~20分,20~30分,30~40 分,40~60分の5区間に分け,それぞれの時間 帯における各空洞部の検出時間を熱画像により 評価した。

(1) 測定開始後0~3分

図 - 5(a)は測定開始から 3 分後すなわち通電 加熱終了直後におけるコンクリート表面の熱画 像である。図 - 5(a)より,鉄筋直上に位置する 空洞部直上のコンクリート表面温度は低くなっ ており,その形状を明瞭に確認することができ る。したがって,鉄筋直上に位置する空洞番号1 と 2 の検出が可能である。一方,鉄筋直上に位 置しない空洞すなわち空洞番号1と2以外は通 電加熱停止直後では確認することが不可能であ る。これは,加熱停止直後では鉄筋から周りの コンクリートに十分熱が伝わっていないものと 考えられるからである。

(2) 測定開始後 3~20 分

図 - 5(b)は,測定開始から 10 分経過した時点 の熱画像である。鉄筋に蓄えられた熱は徐々に コンクリートに移動し,この時間帯においては 空洞番号3と4まで熱が伝わっていることから, 鉄筋側の空洞部分直上のコンクリート表面温度 が,周りの健全部のコンクリート表面温度に比



図 - 5 空洞を有するコンクリート表面の熱画像

べ低くなっている。また,空洞3,4よりも鉄筋から距離が離れている空洞5,6,7および8には熱が伝わっていないことから,空洞部直上と健全部のコンクリート表面の温度差がなく検出不可能である。

(3) 測定開始後 20~30 分

図 - 5(c)は測定開始から 25 分経過した時点で の熱画像である。この時間帯では,鉄筋からの 熱がより広範囲に伝達するため,空洞番号 5 お よび 6 の直上のコンクリート表面温度がその周 りの健全部に比べると低くなっていることがわ かる。一方,この時間帯から,空洞が熱を遮断 していた箇所すなわち,空洞部直上コンクリー ト部にも徐々に熱が伝達するため,今まで確認 できた空洞部直上のコンクリート表面温度には その周りの健全部のコンクリート表面には温度 差がなくなり,空洞 1,2,3 および 4 の確認が 困難となる。

(4) 測定開始後 30~40 分



図 - 6 空洞部 1,2 および健全部のコンクリ ト表面経時温度変化

図 - 5(d)は測定開始から 35 分経過した時点での 熱画像である。この時間帯では,コンクリート 全体に熱が伝わっていることから,空洞 7 およ び 8 の直上のコンクリート表面温度が低くなっ ている。また,空洞 1,2,3 および 4 とその周 りの健全部のコンクリート表面温度には差異が なくなることから,検出が不可能となっている。

(5) 測定開始後 40~60 分

コンクリート全体に熱が移動するため,外気 温の影響を受け全ての空洞部直上と健全部のコ ンクリート表面温度に差異がなくなり,空洞部 の確認が不可能となる。

以上より,鉄筋から空洞までの距離が長くな るにつれ,検出時間は異なるものの本加熱手法 によれば鉄筋中心から 10.5cm 離れた空洞に対し ても評価可能であるものと考えられる。本手法 により,空洞部直上に位置するコンクリート表 面温度は,空洞が存在しない健全部のコンクリ ート表面温度よりも低くなる性状を示すわけで ある。次節では,上述した空洞部直上に位置す るコンクリート表面の温度性状を熱的特性に基 づいて詳細に評価することとする。

3.2 空洞部直上のコンクリート表面温度性状

図 - 6 は,空洞番号1および2直上のコンクリ ート表面とその周りの健全部のコンクリート表 面における温度経時変化である。図中の , および は,それぞれ健全部,空洞番号1 およ び2直上のコンクリートに対応している。図 - 6 より,健全部の最高温度は空洞部と比較すると 高く,また空洞部の温度低下割合は健全部に比 べ緩やかであることがわかる。これは,比熱が



図 - 7 ひび割れを有するコンクリート表面の熱画像

大きく熱伝導率が小さいという空洞の熱的特性 すなわち空洞部は温まり難く冷め難いというこ とによるものであり,前節で示した熱画像にお いて全ての空洞部直上のコンクリート表面温度 がその周りの健全部のコンクリート表面温度と 比較して低い結果となっていたことと一致する。 また,空洞番号1と2の最高温度を比較すると, 空洞1の方が空洞2より高い結果となっている。 これは,鉄筋から空洞までの距離に起因するも のと考えられ,空洞1が鉄筋中心の直上に位置 することに対し,空洞2は鉄筋の直上からわず かながら離れており,鉄筋と空洞間に存在する コンクリートのボリュームに応じて熱が奪われ るためである。

4. ひび割れ供試体の通電加熱試験結果

図 - 2(a)に示す各ひび割れパラメータを明確 にするために,ひび割れ番号1~3をa列,4~6 をb列,7~9をc列,10~12をd列,13~15を e列と称することとし,a,c,e列は,かぶり厚さ 30mmに配筋した鉄筋軸上,b,d列はかぶり厚 さ30mmに配筋した鉄筋と鉄筋の間である。ま た,各列にはパラメータの一つであるひびわれ 幅wの異なるひび割れが存在し,その深さhお よび向きは全て同じである。一方,列による差 異は,ひび割れの深さh,向きおよび位置であ る。ここで,ひび割れの向きとは,かぶり厚



さ 30mm に配筋した鉄筋軸方向に対して直行或 いは平行の向きであり,ひび割れの位置とは, かぶり厚さ 30mm に配筋した鉄筋の直上に位置 するか,または鉄筋間に位置するかである。

本実験で通電加熱を行った鉄筋は,全てかぶ り厚さ 30mm の位置に配筋した鉄筋である。こ こで,図-2(a)に示す a 列,c 列および e 列の鉄 筋をそれぞれ鉄筋 A,鉄筋 B および鉄筋 C と称 することとする。なお,測定時間は空洞供試体 の通電加熱実験と同様に,通電直後から 5 秒間 隔で 60 分間である。

4.1 向きおよび位置に対するひび割れの温度性状

鉄筋 A と鉄筋 B を通電加熱することで,ひび 割れの向きの差異による温度性状の評価を a 列 および c 列の比較から行った。

(1) 鉄筋の直上に位置し向きの異なるひび割れの温度性状

図 - 7(a)は通電加熱終了直後におけるコンク リート表面の熱画像である。同図より,鉄筋直 上である a 列および c 列の全てのひび割れが,周 りの健全部のコンクリート表面温度と比較する と高くなっていることが確認できる。また,c列 においては,ひび割れの長さすなわち 50mmの 長さが明瞭に確認できる。すなわち,ひび割れ が鉄筋直上に位置する場合,鉄筋軸方向に対し て平行に位置するひび割れは直交に位置するひ び割れに比べ鉄筋と重なる領域が大きく,その 領域より放熱しやすいためである。

(2) 鉄筋間に位置するひび割れの温度性状

b 列の温度性状から鉄筋間に位置するひび割 れが,本加熱手法において評価可能であるかを



検証した。図 - 7(b)は,測定開始 15 分後の b 列 の熱画像である。ここで,熱画像からひび割れ を確認することは可能ではあるものの,必ずし も明瞭ではない。したがって,同時刻における ひび割れ中心部のコンクリート表面温度分布図 を図 - 8 に示す。同図より,全てのひび割れ部に おいて,その温度は周りの健全部のコンクリー ト表面温度に比べて高くなっていることが確認 できる。したがって,本強制加熱手法によって 鉄筋間に存在するひび割れの検出は評価可能で あることが確認された。

4.2 深さに対する温度性状の検証

鉄筋 A と鉄筋 C を通電加熱することでひび割 れ深さによる温度性状の評価を行った。

a列のひび割れ深さは30mmであることに対し, e列のひび割れ深さは10mm であり,それぞれの ひび割れ内部の温度経時変化を比較することで, ひび割れ深さの影響を評価した。図 - 9~11 は, a 列および e 列においてひび割れ幅がそれぞれ 2.0, 1.0 および 0.3mm のひび割れ幅内部の温度 経時変化である。まず,各図において,コンク リート表面温度が最高となる時間および各時間 における温度に着目する。いずれのひび割れ幅 においても, a 列のひび割れが最高温度となる時 間が早く、また各時間帯における温度も高い。 これは、ひび割れ深さが深いほど、鉄筋とひび 割れ先端間に存在するコンクリートボリューム が少ないため放熱しやすいためである。すなわ ち、本システムは設定した各種幅を有するひび 割れの評価が可能である。

以上より,本加熱手法において,ひび割れが

鉄筋直上に位置しひび割れの向きが鉄筋軸方向 に平行に位置すれば,直交に位置するひび割れ よりもひび割れの形状を明瞭に確認できる。ま た,本加熱手法において,鉄筋直上に位置する ひび割れに限らず鉄筋間のひび割れの評価も可 能であることがわかった。

5. まとめ

本研究は,著者らが着手している鉄筋の腐食 性状を評価する新たな非破壊検査手法と同方法 で,コンクリート中の空洞およびひび割れの検 出システムの構築に着手した。

以下に本研究から得られた結果をまとめる。

- (1)本手法において,鉄筋通電加熱後の空洞部直 上のコンクリート表面温度は周りの健全部 のコンクリート表面温度にくらべ低くなる ことがわかった。また,本手法によれば鉄筋 の中心からの距離が 10.5cm 離れた空洞に対 しても評価可能である。
- (2) 本手法において,鉄筋通電加熱後のひび割れ 内部温度は,周りの健全部のコンクリート表 面温度に比べ高くなることがわかった。また, 本手法から鉄筋直上に位置するひび割れに 限らず鉄筋間のひび割れに対しても評価可 能である。

参考文献

 茂木淳,山越孝太郎,大下英吉:熱画像処理に基 づくコンクリート内部の鉄筋腐食評価システム 構築に関する基礎的研究,コンクリート工学年次 論文報告書, Vol.25, No.1, pp1679-1684, 2003